

# 研究通信

16.5.3

1966.6刊

村落社会研究会

事務局

東京都目黒区駒場町

東京教育大学農学部

農村社会学研究室内

## 四十一年度

### 共通課題きまる

村研四十一年度第二回拡大委員会は、去る四月二

十日、東京教育大学農学部本館第二会議室で午後六時半より開催された。出席者は小池基之、中野卓、福武直、米地実、竜野四郎、安原茂の六名であった。

委員会は昨年から問題となつてゐる四十一年度大会の課題を主要議題としとりあげた。身延大会で決定されぬままもちこしになつてゐる「村の解体」を存続さすか、どうか、去る二月事務局から会員に送つたアンケートの結果を基にして討論がおこなわれた。アンケートの結果では、「村の解体」というテーマを引き続き存続する希望が圧倒的に多かったが、

それは必ずしも無条件ではなかつた。解体しているという「村」とはそもそもいかなる概念のものか、その規定を必要とするというものや、「解体」とともに再編成されつつあるという側面から考察すべきである、というものの、テーマが長く存続しそぎるのである。この際再検討をする、という意見もあり、要するにテーマについてはさらに徹底した討論を必要とするというのが、会員諸氏の大の方の希望であったと思われた。

以上のような認識に基いて拡大委員会では、まず「村」とは何か、「村」がどのように展開しつつあるか、という問題がとりあげられた。この問題については、近年都市化しつつある近郊村にもなお「村」的要素も強く残存し、その要素が再編入の立脚点にもなりかねない状勢であるという現状が報告された。都市・農村を一貫するこの「村」的要素は、わが国の社会構造に由来するとはいえ、その存続を支えているものは人間関係、とくに商品交換外の諸関係にほかならず、かくて、自治的・共同体的村落はこれわれそうでこわれていない実状が検討された。次に、各地域の報告に基いて討議した結果、いわ

ゆる「村」の解体の際、大きくとりあげられるのは小生産者の問題であるとされ、小生産者－小農民が「村」をどう支えているか、どのような役割を果しているか、「解体」の過程において最も中心となるべき問題となる。かくて小農の動向を把握することが重要であり、土地の移動など所有形態の変化なども併せて考察すべきである、とされた。

また、「村」と外部との関連、とくに「村」と都市、農業と工業との関係に視点をおくなば、町村合併の進行などと相俟って、村落は以前にくらべ少からず自治的・共同体的機能を相対的に弱めており、政治支配の場としてはいぢぢるしく後退しているので、この移行過程を前の問題点と併せて検討することが、会員の大の方の意向に副うことになるであろうということになった。

かくて本年度の課題は

#### 村落における権力構造の変化

##### 一 村の解体と再編成 一

と、なった。

この課題について多少の註釈を加えると、テーマにいう「権力」とはいわゆる政治権力を意味するの

ではなく、村落内外のあらゆる経済的社会的権力を包括しており、Power Structureを意味している。したがって、「村」内の力関係や外的圧力による構造変化などもテーマの中に含まれ、家や同族関係なども当然権力構造を形成する一因子たりうると考えられよう。

なお、副題に「村の解体と再編成」をつけ加えたのは、前記アンケートの回答が「村の解体」のテーマの存続を可としており、またそれだけでなく「再編成」の動向把握もかなり多く希望されており、会員諸氏の期待に副う意味あるである。

